

<新刊紹介>新世紀の長編作家の誕生を祝す : 北原文雄著『島の春』読後の印象

著者	堀江 泰紹
雑誌名	日本文学誌要
巻	63
ページ	126-126
発行年	2001-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020162

新世紀の長編作家の誕生を祝す

―北原文雄著『島の春』

読後の印象―

堀江 泰紹

本書は現代の、世紀末の日本の淡路島農業を中心主題とした四組の農民夫婦、いふなれば日本の今日の農業の現実をリアルタイムで追跡した一種のドキュメント小説の赴きがある。しかもこの淡路島の農業を営む農家族は、二家族は専業農家（花卉農家と酪農家）であとの二家族は兼業農家（一人は兵庫県職員で、もう一人は地元農協職員で農業共済担当で消防団分団長）と、この長編小説の代表登場人物として描かれている。

作者の北原文雄氏は法政大学文学部日本文学科卒で郷里の淡路島で公立高校の教師をされている。在学中はことに小原元教授と小田切秀雄教授に私淑して在学中から小説の修行をしており、淡路島に帰ってからずっと同人雑誌『文芸淡路』を主宰して文学活動をして来られた。一九九五年に単行本『田植え舞』で第三十

八回農民文学賞を受賞された。作者の小説作法は集団の描写が巧みであるという特技があり、農民文学賞受賞作品の『田植え舞』にもこの手法が駆使されて作品構成の決め手となっていた。それが今回の『島の春』で最初と最後の場面で見事に対をなしていた。

本書の本当の主題は、ぼくは阪神淡路大震災の姿を描くことであつたと確信している。そしてその主題は作者のしなやかな小説作法の手法の成就によって見事に成功した。とくに大震災が発生する前年の暮れから正月にかけての日記的な記述の迫真性はその一月十六日朝の大震災発生時への時間設定の綿密さにおいて寸分の瑕疵もゆるさない精密な構成の計算がなされている。

ヒーローの設定もさることながらヒロインの設定に感心した。とくに大滝桔梗という女性の創造は作者にはひそかな自信があつたのではないか。また倒壊家屋からの人命救出作戦を指揮していた島田達夫が赤ちゃんを救出した時点の描写には思わず快哉を叫ぶほどの感動を抱いた。阪神淡路大震災についての作者なりの

コメントもそれほど執拗ではなくさらりと書いており好感を持った。これまで作者の短篇小説を読んで来て何か短篇小説としての切り口の甘さを感じて不満が残った印象があつたが、今回の本書を読んではたと閃いたものがあつた。それは北原文雄という作家の資質が長編作家という才能に恵まれていた事実に気づいたからである。法政大学文学部日本文学科出身の新世紀をトする長編作家の誕生をここに祝福するものである。

（ほりえ やすつぐ・一九六二年卒）

▽二〇〇〇年・武蔵野書房・

二二〇〇円十税

△著者＝一九七一年卒